

白居易「舊枕故衾誰與共」句の傳播と消滅

静永, 健
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/7172218>

出版情報 : 東方學. 147, pp. 59-75, 2024-01. 一般財団法人東方学会
バージョン :
権利関係 :



東方學

第四百十七輯

令和六年一月

東方學會

白居易「舊枕故衾誰與共」句の傳播と消滅

靜 永 健

亡き葵上を悼み、光源氏が書き綴ったのは唐の詩人白居易「長恨歌」の一節と、それに想を得た自作の和歌であった。あはれなる事ども唐のもやまとの書きかけがしつ、草にも眞名にもさまざまめづらしきさまに書きまぜ給へり……ふるき枕ふるきふすま誰とともにかとある所に、

なき魂ぞいとどかなしき寝し床のあくがれがたき心
ならひに

また霜の花しろしとある所に、

君なくて塵つもりぬる常夏の露うちはらひ幾夜寝ぬ
らむ

一日の花なるべし、枯れてまじれり。

『源氏物語』葵(1)

既に多くの先行研究(2)が指摘する通り、この「舊枕故衾

誰與共」一句は、全集として現在通行する『白氏文集(一名白氏長慶集)』卷十二(3)所收の「長恨歌」には見えないが、我が國に傳わる『金澤文庫本白氏文集』など所謂〈舊鈔本〉と稱される各古寫本(4)所收のそれに一致し、平安時代紫式部たちが目にしたのは、まさしくこの系統に屬するテキストであったと考えられている。即ちその前後八句を掲げると次のようになる(傍點は筆者、以下同)。

〈舊鈔本〉

67 夕殿螢飛思悄然

68 秋燈挑盡未能眠(5)

69 遲遲鐘漏初長夜

70 耿耿星河欲曙天(6)

71 鴛鴦瓦冷霜華重

72 舊枕故衾誰與共(7)

〈全集本〉

夕殿螢飛思悄然

孤燈挑盡不成眠

遲遲鐘鼓初長夜

耿耿星河欲曙天

鴛鴦瓦冷霜華重

翡翠衾寒誰與共

悠悠生死別經年

73 悠悠生死別經年

悠悠生死別經年

74 魂魄不曾來入夢

魂魄不曾來入夢

本稿はこの「長恨歌」の異文をめぐり、それが何故紫式部ら我が國平安文人たちの依據するところとなったのか、その傳播の原因を探るとともに、またその同じ異文が、本國中國において何故徐々に消滅していったのかという問題について、幾つかの考察を行ったものである。

一 白居易の後半生と「長恨歌」

まずその前提として、白居易（七七二—八四六）が自作「長恨歌」と如何に向き合っていたか、その後半生を大まかに辿っておこう。

「長恨歌」は元和元年（八〇六）冬十二月の作⁽⁹⁾。數え年で白氏三十五歳。長安近郊、秦嶺山脈の一つ樓觀山北麓の盤屋縣尉在任中に、現地の王質夫・陳鴻らとともに仙遊寺を訪れ、そこでの酒席においてこの詩を披露したという。因みに盤屋縣は、楊貴妃が死を賜った馬嵬驛（武功縣に屬す）に隣接し、且つこの元和元年は貴妃落命（七五六年六月）の五十年目に當る。かかる因縁に據って發表されたこの物語詩は、同行した陳鴻の「長恨歌傳」を并せてまたたく間に都城長安の人士の注目を集め、まさに空前の大流行を見たのだった。

例えば白氏自らが語るように、都のある、倡妓がその朗誦を誇って價を増したり、また地方の酒宴でも、妓女たちが彼を見付けて下品にも「秦中吟・長恨歌の主」だと指差した出來事⁽¹⁰⁾は、白氏の士大夫としての矜持に大きな衝撃を與えたことだろう。同じ書簡文中（「與元九書」）に彼は云う「時の重んずる所は、僕の輕んずる所なり」と。當初の豫想を遙かに上回った「長恨歌」の評判は、作者である白氏を相當に苦しめたのである。

以後白居易は、その約四十年に亙る長い後半生において、次に列挙するように幾度も自らの詩文集を編むことになるが、恐らくその都度、彼は「長恨歌」の本文に再會し、何らかの思いを新たにしたに違いない。

(1) 元和十年（八一五）、江州司馬に左遷され、直後に『詩集』十五卷を編む⁽¹¹⁾。

(2) 長慶四年（八二四）、友人元稹に據って『白氏長慶集』五十卷が成る⁽¹²⁾。

(3) 太和二年（八二八）、新たに『後集』五卷を加う⁽¹³⁾。

(4) 太和九年（八三五）、『白氏文集』六十卷（長慶集五十卷・後集十卷）を廬山東林寺に納む⁽¹⁴⁾。

(5) 開成元年（八三六）、『白氏文集』六十五卷（長慶集五十卷・後集十五卷）を洛陽聖善寺に納む⁽¹⁵⁾。

(6) 開成四年（八三九）、『白氏文集』六十七卷（長慶集五

十卷・後集十七卷）を洛陽聖善寺・廬山東林寺・蘇州南禪院の三箇所にそれぞれ納む⁽¹⁶⁾。

(7) 會昌二年（八四二）、『白氏文集』七十卷（長慶集五十卷・後集二十卷）を廬山東林寺に納む⁽¹⁷⁾。

(8) 會昌五年（八四五）、『白氏文集』七十五卷（長慶集五十卷・後集二十卷・續後集五卷）を五本作成し、廬山東林寺・蘇州南禪院・洛陽聖善寺、また姪の龜郎と外孫の談閣童の家に藏せしむ⁽¹⁸⁾。

現在「長恨歌」並びに陳鴻「長恨歌傳」については、現存する諸本を校合すると、先に掲げた其67〜74句の部分に留まらず、各處において百數十件に及ぶさまざまな本文異同が認められる⁽¹⁹⁾。勿論これらの大半は、後世の筆抄時に何者かが生じさせてしまった不注意な轉寫ミスであろう。しかし中には、原作者白居易に據るかとおぼしき意圖的な改變も含まれていると考えられる。

このことに關して太田次男氏に次のような指摘がある（紙幅の都合で引用文の一部を中略）。

ある文人の作品が、その全作品とは別に單獨で行われ、それが多くの人にまで廣く愛誦されたとすれば、その本文が大集所收の場合にも増して、種々の改變を蒙り易いことは止むを得ないところである。……五十卷の大集が成立した後、白氏はそれに續いて更に四次に亙り、これ

白居易「舊枕故衾誰與共」句の傳播と消滅（靜永）

に増補を加えた。……その間に、尠からざる舊作諸篇に筆を加えてこれを改めることも、當然の事として認められよう。……つまり、前述の如く、一方は外に於て、白氏の手を離れた所でその作品は改變が加えられ、他方内に於ても、原作者自からの手によって若干の改變が計られていたといえる。

（太田次男「長恨歌」「長恨歌傳」の本文）⁽²⁰⁾

太田氏はこのような卓見を残しつつも、遂に「長恨歌」の本文において一體いづれの箇所が白氏自らの改變であるかを明言されなかったが、筆者は少なくともその最も可能性のある一つが「舊枕故衾／翡翠衾寒」の異同だと考える⁽²¹⁾。これは一見不注意な轉寫ミスを装いつつも、そのような誤寫の際に有りがちな兩者の混亂が讀み取れる中間的な異文（例えば「翡翠枕」や「衾故」など）が全く確認されないことがその理由の一つ。しかしその何よりの證據は、次章に述べるように異文が生じたテキスト群にある、特徴的な偏りがあり、それを辿ってゆくと恐らくは原作者白居易による作品公開の時間や場所、およびその目的の差異などに基づくのではないかと思われる痕跡が幾つか見出されるためである。

二 宋明時代の「舊枕故衾」句

「長恨歌」第72句の異同に關しては、本稿冒頭に掲げた

《舊鈔本》《全集本》のほか、あともう一種類の注目すべきテキスト群がある。宋代そして明代に成立した唐代詩文の《選集》である。以下それらの異同を列挙したいが、目視の便をはかり舊鈔本系統には書名に《》を、全集本系統には『』を、そして注目の選集本系統²²⁾には【】を付しておく。

《金澤文庫本》…舊枕故衾誰與共

《管見抄本》…舊枕故衾誰與共

《正宗文庫本》…舊枕故衾誰與共

《龍門文庫本》…舊枕故衾誰與共

《文苑英華本》…舊枕故衾（集作翡翠衾寒）誰與共

《太平廣記本》…翡翠衾寒誰與共

《虞初志本》…舊枕故衾誰與共

《唐詩解本》…舊枕故衾（本集作翡翠衾寒）誰與共

《南宋紹興本》…翡翠衾寒誰與共

《那波道圓本》…翡翠衾寒誰與共

《明馬元調本》…翡翠衾寒誰與共

《清汪立名本》…翡翠衾寒誰與共（一作舊枕故衾誰與共）²³⁾

このうち【太平廣記本】（明談慔本）については、本章の後半に改めて取り上げるので、しばらく置く。

まずはここで敢えて筆者の考える結論を先に述べるならば、この「舊枕故衾」の異文を持つテキストは、本土中國においては全集『白氏文集』には収録されず、あくまでも單行

で伝えられた「長恨歌」（また恐らくは陳鴻「長恨歌傳」を併録）に限られるのではないか、ということになる。そしてそのテキストは、唐の舊都長安及び洛陽もしくは五十歳の白居易が刺史として在任した杭州蘇州の江南地域に傳承されていて、やがてそれが北宋になって開封の皇宮内に運び込まれたものと思われる。この推定は、まず【文苑英華本】の校記に「集作翡翠衾寒」とあることに矛盾しない。『文苑英華』一千卷（太平興國七年・九八二年奉勅撰）には、合計七〇〇首近い白氏の詩文が収められているが²⁴⁾、その中には、白氏の全集には據らず、敢えて當時巷間に傳えられていた簡便な抄本類より轉記されたとおぼしき作品も含まれている。例一、『文苑英華』卷三三六所收の標題を「四不如酒」とする歌詞は、全集各本では「啄木曲」（花三二〇四・謝一四〇八）と題する。この異同は恐らく歌の原曲名に基づく白氏の全集と、そののち宴席などで多くの人々が呼び慣わした俗稱（「四たび酒推しの歌」の差異だと考えられる。因みにこの詩は五代後蜀の韋穀撰『才調集』卷一にも「四不如酒」の題で収録される。例二、同じく『文苑英華』卷三三六に白居易作「勸酒二首」がある。このうち其二（勸君一盞君莫辭…、全十六句）一首は全集にも見え、間違ひなく彼の作と認められる（花三二三九・謝一四四三）。だが其一（昨與美人對樽酒…、花三六八四・謝外〇四五、全三十八句）は文字數が大幅

に増え、また内容もおよそ白氏のものとは思えぬ駄作であって、恐らくは後人の偽作が抄本の段階で紛れ込んだものである。白居易そして彼の親友元稹は、よく知られているように自分たちの詩歌が市井に流行しているさまを實際に目の當りにしたが²⁵⁾、同時にそれはこのような偽作の横行にも悩まされるものだったのである。例三、『文苑英華』卷二一三に大曆十才子の一人盧綸の詩と、その宴席に陪した四詩人の名が記されている²⁶⁾。残念ながら盧綸以外の詩が傳わらないが、ここに若き日の白居易²⁷⁾の名が書き留められている。五人は開府と稱される貴人の宴に集い、座興としてそれぞれが美人（即ち同座に招かれた妓女か）の名を詠み込んで五言律詩を作ったのである。以上の諸例により、『文苑英華』に収録される白氏の作品の一部には、恐らく北宋初期には未だ豊富に残されていたであろう唐代以来の單行抄本より寫し取られたものも存在すると考えられる。そして白氏最大の流行作「長恨歌」については、全集に據らず、やはりこのような單行抄本に基づく可能性が極めて高いと考えられるのである²⁸⁾。

さて次に明代『唐詩解』の撰者唐汝詢の場合に移ろう²⁹⁾。

まずこの人物については、最初に指摘しておくべき二つの重要事項がある。第一、明末の上海近郊華亭縣に生まれ育った唐汝詢（一五六五〜一六五九）は、不幸にも五歳の時に兩眼

の光を失い、多くの書籍を家族等周囲の人々の讀誦によって記憶したという誠に稀有な存在である³⁰⁾。第二は、聊か自明のこと乍ら當時明代一般の文風、即ち李攀龍・王世貞ら古文辭派の唱道に従い、彼もまた唐詩を好んだが、その諳んじる所は盛唐の作品に偏重し、中唐とくに白居易の詩歌については讀み聞かせの機會がほとんど無かったようである。

全て耳からの享受であり、且つ經濟的にも高價な稀覯本や大部の叢書類を持ち合わせない唐汝詢は、『唐詩解』五十卷を編むに當って、その根據となる作品を主に高棟『唐詩品集』一百卷、同じく高棟『唐詩正聲』二十二卷、そして李攀龍『唐詩選』七卷より求めたと考えられるが³¹⁾、この三種の選集に「長恨歌」は収められない。彼は恐らく當時の上海一帯で民間に傳承されていた所謂說唱文藝のようなものによって「長恨歌」およびその「傳」を聞き覺えたかと思われる³²⁾。果たして『唐詩解』卷二十所收の「長恨歌」は、冒頭より次のように粗惡な誤字を含むものであった（傍線は筆者、以下同）。

1 漢皇重色思傾國 2 御宇十年求不得（全集本作多年）

3 楊家有女初長成 4 養在深閨人不識（全集本作未識）

しかしこのような残念なテキストではあるが、さらに讀み進めてゆくと隨處に我が國の舊鈔本や先述の【文苑英華本】に一致する箇所も見出され、このテキストは恐らく中國にお

いて、長らく白氏の全集とは一定の距離を保って傳承されてきたものだったと判斷される。

以下の舉例の○印部分は【唐詩解本】の本文が【文苑英華本】及び舊鈔本系統の文字に一致する例である。

17 承歡侍寢無閒暇（全集本作侍宴）

19 漢宮佳麗三千人（全集本作後宮）⁽³³⁾

54 雲棧縈迴登劍閣（全集本作縈迂）

55 峨嵋山下少行人（全集本作人行）

68 秋燈挑盡未成眠（全集本作孤燈）

69 遲遲鐘漏初長夜（全集本作鐘鼓）

72 舊枕故衾誰與共（全集本作翡翠衾寒）

85 樓殿玲瓏五雲起（全集本作樓閣）

では唐汝詢の耳受「長恨歌」の原據は何かと言えば、既に本章冒頭の第72句の異同表に示したように、同じく明末の江南で刊行されたと思われる『虞初志（一名陸氏虞初志）』卷二⁽³⁴⁾所收の「長恨傳」と題する版本に、かなりの類似性が認められるのである。例えば次の通り。

2 御宇十年求不得 4 養在深閨人不識

17 承歡侍寢芙蓉暇 19 漢宮佳麗三千人

54 雲棧縈迴登劍閣 55 峨嵋山下少行人

68 秋燈挑盡未能眠 69 遲遲鐘漏初長夜

72 舊枕故衾誰與共 85 樓殿玲瓏五雲起

二句に舊鈔本系統の文字を見出すことができる（しかもここには肝心の第72句を含む）。

17 承歡侍寢無閒暇 72 舊枕故衾誰與共

明末の唐汝詢が記憶する「長恨歌」が北宋の『太平廣記』

とどのように結び着くのか、その経路の詳細は未だ明らかではないが、これに『虞初志』を加えた三者は間違いなく一つの水源より流れ出たテキストであり、恐らくそれは白氏の全集とは出自を異にし、一方『文苑英華』所收の本文に近似することから、やはりこれも唐代以来の單行抄本だと推定される。なお、筆者はここに一つの假説として白居易が實際に杭州刺史（八二二～八二四年）、蘇州刺史（八二五～八二六年）に在任していた時を一つの出發点とすることが出来るであろうと考えている。彼は杭州そしてまた蘇州において、曾て憲宗朝の内宴で演じられていた「霓裳羽衣」の舞曲を現地の官妓たちに教習させている。しかもそれを語った「霓裳羽衣歌」（花二〇二・謝一四〇六）の一節には⁽³⁵⁾、

君不見 我歌云 君見不 我歌に云ふ、

驚破霓裳羽衣曲 驚破す 霓裳羽衣の曲と。

と、堂々自らの「長恨歌」第32句を披露しているのである。刺史となって江南の繁華な都市に赴任した彼には、もはや曾て「長恨歌の主」として指差されていた頃の忸怩たる思いは、漸く薄らぎつつあったようである。

白居易「舊枕故衾誰與共」句の傳播と消滅（靜永）

97 空將舊物表深情（唐詩解本作唯將）

途中「ママ」の傍注を施した三箇所は【唐詩解本】に一致せぬ部分であるが（従って唐汝詢は『虞初志』を直接讀み聞かせられたのではない）、第17句「芙蓉」は明らかな誤字としても、第68句「未だ眠る能はず」と第97句「空しく舊物を將て」などは、逆に【虞初志本】の方が日本舊鈔本の文字に一致し、やはり白氏の全集とはかなりの隔たりが見いだされるのである。

そしてさらにこの兩者に共通する祖本として、ここにいよいよ北宋『太平廣記』（太平興國二年・九七七年奉勅撰）が登場する。再び上の舉例部分を現在一般に通行する明の談愷刻本によって示す。

2 御宇多年求不得 4 養在深閨人不識

17 承歡侍宴無閒暇 19 漢宮佳麗三千人

54 雲棧縈迴登劍閣 55 峨嵋山下少行人

68 孤燈挑盡未成眠 69 遲遲鐘漏初長夜

72 翡翠衾寒誰與共 85 樓殿玲瓏五雲起

97 空將舊物表深情

舉例十一句のうち四句が全集本系統に改まったが、なおも七句は舊鈔本の文字を残している。しかしここに誠に幸運にも清初の藏書家孫潛による宋鈔本（南宋高宗朝のものと思われる）との校勘記が傳わっており⁽³⁶⁾、それに據れば更に次の

なお『太平廣記』『虞初志』そして『唐詩解』の唐汝詢注に共通するものとして、陳鴻「傳」の存在がある。三者は一致して標題を「長恨傳」とし、かつその物語部分の結末を以下のように結んでいる。

使者還奏太上皇、皇心嗟悼久之。

使者還りて太上皇（玄宗）に奏す、皇心 嗟悼すること之を久しうす。

「長恨歌傳」なのか、「長恨傳」なのか、この標題の變更も興味深い。とにかく『太平廣記』『虞初志』そして『唐詩解』の三者に收録されたこれらは、全集本系統の「長恨歌傳」末尾に附された白居易の創作意圖⁽³⁷⁾などには關心は薄く、ただ純粹に玄宗楊貴妃の別離と再會（寸前？）までの物語を楽しんでるかのよう讀める。いや、そもそも「長恨歌」は、元和初年の仙遊寺での發表當初より、酒宴の座興として歌い讀まれていたものだった筈である。それは歌唱を受け持つ妓女や、宴に集う賓客たちの懷中にそっと備忘録的に攜えられていたものであり、ある意味ではそれらが最初の單行抄本とも言える。また、その本文が全くそのまゝ白氏による字句の集に引き續かれるとは考え難く、時に白氏本人による字句の改變も大いに可能性有りとななければなるまい。するとここに白氏の全集收録作品と「長恨歌・傳」單行抄本との本文異同が生まれる。しかし校勘時の優劣は歴然。明代『太平廣

記』談愷本のように白氏の全集を正しい本文と考え、「舊枕故衾」四字を拭い去ってしまう者が現れるのは、もはや當然の趨勢である（唯一、盲目の唐汝詢を例外として）。かくして中國における「舊枕故衾」系テキストは敢えなく消滅していったのである。

三 日本の「舊枕故衾」句

「舊枕故衾」系統のテキストは、唐から宋そして明末までの本土中國において、白氏の全集とは別に、零碎な單行本（抄本）として伝えられていた。さてこの事實は、我が國の「長恨歌」傳播の問題にも幾つか解明のヒントを與えるように思われる。

單行抄本はまず流通が簡便である。誰でも、そして何處（つまり海外）においても容易に寫本を作ることができる。そして日本に到着したこれらの巻軸には、やがて訓點が施された筈である。我が國で最初に白樂天の名が知れ渡ったのは、決して彼の別集（個人詩集）からではなく⁽³⁹⁾、恐らくこれら「長恨歌」などの單行抄本が先であつた可能性が高い⁽⁴⁰⁾。

陳鴻「長恨歌傳」の附録も有り難い。これによって平安日本の人材女たちは、より生き生きと玄宗楊貴妃故事の世界に想像力を掻き立てられたことであろう。複數の作者の關連

作品を隨意に比べ讀むのも單行抄本ならではの融通性であるが、それらの作品群は互いに雙方の注釋となり得るため、もしかすると當時は單一の作者の別集よりも寧ろ愛讀されていたかもしれない。

例えば再び『源氏物語』に戻れば、葵上の急逝を悲しむ光源氏は、先の「舊枕故衾」句の引用の前にも、ある唐詩の一句を吟じている。

時雨うちして物あはれなる暮れつ方、中將の君、鈍色の直衣、指貫うすらかに衣更へして、いとををしう鮮やかに心はづかしき様して参り給へり。君は西のつまの高欄に押しかりて、霜枯れの前栽見給ふほどなりけり。風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙も争ふ心地して、雨となり雲とやなりにけん、今は知らず。

（『源氏物語』、葵）

これは既に源氏古注釋の指摘があるように⁽⁴¹⁾、劉禹錫「有所嗟二首・其一」の結句に當たる。

有所嗟（其二） 嗟く所有り

劉禹錫

庚令樓中初見時 庚令の樓中 初見の時、

武昌春柳似腰肢 武昌の春柳 腰肢に似たり。

相逢相失兩如夢 相逢ひ相失ふこと 兩つながら夢の如

し、

爲雨爲雲今不知 雨と爲るや 雲と爲れるや 今は知ら

たのであろうか。

鄂州（現在の武漢）出身の美貌の妓女の早世を嘆く詩歌であるが、これには白居易の和作があり、恐らく『劉白唱和集』⁽⁴²⁾に併記されていた筈である。

和劉郎中傷鄂姬 劉郎中の鄂姬を傷むに和す

（白氏自注…姬、鄂人也。）

白居易

不獨君嗟我亦嗟 獨り君の嗟くのみにあらず 我も亦た

嗟けり、

西風北雪殺南花 西風 北雪 南花を殺すを。

不知月夜魂歸處 知らず 月夜に魂の歸する處、

鸚鵡洲頭第幾家 鸚鵡洲頭の第幾家ならん。

（花二五五二・謝一七五四）

紫式部が讀んだのは、きっとそのような劉白併載の小詩卷であつたのだろう。筆者は平安文學研究については門外の者ではあるが、先の「舊枕故衾」句が源氏の左大臣邸での獨居の場面（且つ義父たりし左大臣の回想として）に登場し、この「爲雨爲雲」句が三位中將（頭中將）と源氏二人の遣り取りの中に見出されるのは、式部が根據とした原本の違いを意識したものではないか、と想像する。平安の人々にとってはこのような單行抄本は當時實に手軽で身近な存在だったと思われるのである⁽⁴³⁾。

では「長恨歌・傳」の單行抄本は、我が國に何時渡って來

白居易「舊枕故衾誰與共」句の傳播と消滅（靜水）

いよいよ難しい問題に立ち至ったが、主に本文の異同に立脚する本稿においては、その渡來は「長恨歌」が詠まれて間もない元和年間前半期（即ち元和十年以前）ではないかと考える。「長恨歌」中盤の第50句に、

50夜雨聞猿腸斷聲（全集本・選集本皆作聞鈴）

がある⁽⁴⁴⁾。この「聞猿／聞鈴」もやはり白氏自らの改變であると考えらるならば、その可能性が最も高いのは、本稿第一章の（1）元和十年（八一五）の江州司馬左遷直後の『詩集』十五卷編集の時期となるであろう。

この年、自作の詩歌をめぐって、二人の詩人が朝廷で非難を浴びた。一人は劉禹錫。左遷地朗州より十年ぶりに長安に戻った彼は、玄都觀の桃花を詠じ⁽⁴⁵⁾再び連州刺史に落とされる不幸に見舞われた。そしてもう一人は白居易當人。彼は同年六月に起こった宰相暗殺事件に絡んで、先述の通り江州司馬に左遷されるのだが、その弾劾狀には彼の「賞花」「新井」の詩と母の死との關係を問題視する文言が記されていた⁽⁴⁶⁾。まさに挙げ足を取るようなこうした批判は、彼らに自作の詩歌について改めて慎重な行動を促したことである。實は同年、更にもう一人の詩人が同様の悲劇を蒙っている。それは十年前に劉禹錫とともに左遷された八司馬の一人、柳宗元。彼もまたこの年正月に憲宗の詔を受けて長安に

戻ったのだが、すぐさま柳州刺史として都を去る仕儀となったのである。その柳宗元の詩集に、二年前の永州司馬在任中の作として「入黃谿聞猿（黃谿に入りて猿を聞く）」と題する詩が収められている⁽⁴⁷⁾。本来、猿の哀鳴は中國南方の風物の一つとして詩歌に常用されるものではあるが、當時政治的に注目視されていた人物の作品に見える表現（「聞猿」「斷腸聲」）が、上皇玄宗の行宮滞在中の描寫に一致することは、できれば避けておくべきものではなかっただろうか⁽⁴⁸⁾。

よってここに第50句を「夜雨聞猿」に作るテキスト（『金澤文庫本』『管見抄本』『正宗文庫本』）と、「夜雨聞鈴」に作るテキスト（『文苑英華本』等選集本系、『南宋紹興本』等全集本系のすべて、また『龍門文庫本』との間に書寫の時間的な差が生まれ、前者のテキストが多く傳來している我が國の舊鈔本「長恨歌・傳」は、元和十年以前に將來された可能性が見いだせるのである。

次に第72句「舊枕故衾」四字が「翡翠衾寒」に改められたのは何時か。これは本稿第一章の（4）太和九年（八三五）廬山東林寺納入以後と考えられる。

晩年の白居易が頻繁に自らの文集を輯綴し佛寺の經藏に納めたのは、我が現世の狂言綺語⁽⁴⁹⁾を懺悔し、來世の多幸を願う故であった。その時すでに齡六十を重ねた彼にとって、三十代に作った悲戀の物語詩の幾つかの艶冶な表現⁽⁵⁰⁾は、

題材（ブルースト効果）ではあるが、「薰」や「匂ひ」を人物名に登場させる式部ならば必ずやそれを鋭敏に讀み取っていたに違いないのである⁽⁵¹⁾。果たして、冒頭所掲葵卷の場面⁽⁵²⁾の最後には「一日の花（押し花）」がそと挿し挟まれていたのである。

このように考えを進めて来たが、最後に大きな問題點が残されている。それは單行抄本によって傳播したと思われる「舊枕故衾」の本文が、何故白氏の全集である筈の『金澤文庫本』に見えるのか、という疑問である。現在『金澤文庫本』の基づいた蘇州南禪院本は會昌二年（八四二）完成の七十卷本だとされる⁽⁵⁴⁾。しかしこれまで述べて来たように本土中國においては全集系統各本に「舊枕故衾」の文字は存在しない。もしかすると「長恨歌傳・長恨歌」の部分は、もとの惠尊筆寫本そのままではなく、日本に先行して傳來した單行抄本に依って差し替えられているのではなからうか。

『金澤文庫本』卷十二にはそれが疑われる根拠が幾つかある。まず巻頭の收録詩數を「凡八十五首」とする（傍らに「二十九摺本」の訂正有り）、巻末の奥書「會昌四年十四日（等厲惠白）」の誤字（つまり鎌倉時代には既に判讀が難しくなる迄に詩卷が破損していたと考えられる）、そして「長恨歌」本文第25、26句「遂令天下父母心不重生男重生女」の部分の不自然な改行（下欄の罫線が左に傾き本文が無理遣

あらたな變改の時を迎えていたのではなからうか。従って現在傳わる『白氏文集』の全集各本は、ある一本の例外（後述）を除き、全てが「翡翠衾寒」の本文を正しいとするのである。

四 「金澤文庫本」への疑問

本稿は飽くまでも「舊枕故衾」の本文がまさしく白居易の眞作だ（また「翡翠衾寒」も白氏自らの改變）との假定のもとに書かれている。このことの檢證は、もちろん今後も繼續されねばならないであらう。

しかし「舊枕故衾」句は、紫式部を感動させたという點で、やはり白氏の原作たるに相應しい秀逸な表現ではないだろうか。例えば唐傳奇「枕中記」にも描かれるように、枕こそは主人公を異世界に誘う重要な品でもある⁽⁵⁵⁾。玄宗は曾て楊貴妃と過ごした「舊枕」のもとにあるが、蓬萊宮に昇仙した楊太眞は九華帳裏の93「枕を推し」のけるまで眠り続ける⁽⁵⁶⁾。枕が「舊」いとは何か。現代日本語の語感では枕が破損し、或は織布等の色褪せる視覚的イメージが想起されやすいが、ここは單に貴妃の不在（消滅）を言うのみ。そして、その「舊」字が指すものは、人間界での在りし日の思い出であり、枕に移りし現世身の残り香と言えようか。芳香と記憶との關連付けは主に二十世紀以後の近代文藝が注目する

り追い込まれている⁽⁵⁷⁾などである。また内閣文庫『管見抄本』にも同様の疑問がある。こちらは「長恨歌傳・長恨歌」の部分に至って「天子」「君王」など帝號に對する各一字分の空格が施される（同抄本中の「新樂府」等には帝號に對する空格は見えない）のである。これらの問題についても引き続き檢討を重ねたい。

注

（1）柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『源氏物語（二）紅葉賀・明石』（岩波文庫、二〇一七年）等参照。

（2）遠藤實夫『長恨歌研究』（建設社、一九三四年）、丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』（東京女子大學學會研究叢書3、一九六四年）等参照。

（3）本稿では次の四種を全集の代表的なものとする。

a. 南宋紹興年間刊本—中華再造善本影印『白氏文集』（北京圖書館出版社、二〇〇三年）所收、本稿では以後「南宋紹興本」と稱する。

b. 江戸那波道圓刊本—下定雅弘・神鷹徳治編『那波白氏文集（宮内廳所藏）』（勉誠出版、二〇一二年）所收、本稿では以後「那波道圓本」と稱する。

c. 明馬元調刊本—『白氏長慶集』七十一卷、目錄上・下、萬曆三十四年（一六〇六）婁堅序（九州大學附屬圖書館藏、同館ホームページで全畫像を公開）、本稿

では以後「明馬元調本」と稱する。

- d. 清汪立名刊本『白香山詩集』(長慶集二十卷、後集十七卷、別集一卷、補遺二卷)、康熙四十二年(一七〇三)一隅草堂刊本(九州大學附屬圖書館藏、cに同じく全畫像を同館ホームページで公開)、本稿では以後「清汪立名本」と稱する。

- (4) 本稿では次の四種を舊鈔本の代表的なものとする。

- e. 寛喜三年(一二三三)豊原奉重筆寫文集卷第十二大東急記念文庫所藏。川瀬一馬監修『金澤文庫本白氏文集(一)』(勉誠社、一九八三年)所收、本稿では以後「金澤文庫本」と稱する。

- f. 永仁三年(一二九五)關東田中坊筆寫管見抄一國立公文書館内閣文庫所藏。全畫像と同館ホームページで閲覧可能。本稿では以後「管見抄本」と稱する。

- g. 正安二年(一三〇〇)六條有房筆寫長恨歌一ノートルダム清心女子大學古典叢書3『正宗敦夫本長恨歌』(福武書店、一九八一年)所收、本稿では以後「正宗文庫本」と稱する。

- h. 清原宣賢(一四七五—一五五〇)筆寫長恨歌并琵琶行一阪本龍門文庫覆製叢刊4『長恨歌并琵琶行』(同文庫發行、一九六二年)所收、本稿では以後「龍門文庫本」と稱する。

- (5) 「夕殿…」二句は藤原公任『和漢朗詠集』(巻下・戀・作品番號七八一)にも見え、しかも本文は舊抄本に一致する。三木雅博『和漢朗詠集 現代語譯付き』(角川ソフィア文庫、

二〇一三年)等参照。また平安末期、慈圓・藤原定家・寂身の三者による句題和歌『文集百首』にもこの二句は選ばれた(第五十二番)、やはり舊抄本に一致する。文集百首研究會『文集百首全釋』(風間書房、二〇〇七年)参照。

- (6) 「遅遅…」二句も『和漢朗詠集』(巻上・秋夜・番號二三四)のほか、先行する大江維時『千載佳句』(巻上・秋夜・作品番號一八六)に見え、いずれも舊抄本に一致する。また前注に同じく『文集百首』(第三十一番)も一致。

- (7) 「鴛鴦…」二句は藤原基俊『新撰朗詠集』(巻下・戀・番號七三三)にも見え、しかも本文は舊抄本に一致。佐藤道生・柳澤良一『和漢朗詠集・新撰朗詠集』(和歌文學大系47、明治書院、二〇一一年)等参照。『文集百首』(第五十五番)は「舊枕…」一句のみを題に記すが、詠歌の内容は續く其73「74句」悠悠生死別經年、魂魄不曾來入夢」までをも包攝する。定家句に云う「とこの上にあふき枕も朽ちはてて通はぬ夢ぞ遠ざかりゆく」と。これは源氏葵卷の和歌「なき魂ぞ…」の趣向にも一致する。

- (8) 現在、白居易の作品番號は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(朋友書店、一九七四年再版)に據るものと、謝思煒『白居易詩集校注』(白居易文集校注)(中華書局、二〇〇六年・二〇一一年)に據るものの二種が行われている。以下、本稿ではこの「長恨歌」がそうであるように「花〇〇〇〇・謝〇〇〇〇」と兩方の番號を併記する。

- (9) 根據資料は陳鴻「長恨歌傳」(『白氏文集』卷十二所收)。なお白居易が楊貴妃にまつわるさまざまな故事や傳承を知り

- 得たのは、その年四月に行われた特別試験「才識兼茂明於體用料」に應ずるため、前年より數箇月間永樂里の華陽觀に住み込んで勉強に勵んだ際の事だったと思われる。靜永「華陽公主の面影」白居易をめぐる永貞期の青年群像」(九州大學『文學研究』第百十六輯、二〇一九年)参照。
- (10) とともに白居易「與元九書」(花一四八六・謝二八八三)に見える逸話。なお後半の逸話に記された妓女の言葉「此是秦中吟長恨歌主耳」の「主」は、酒宴などでの同席者への呼稱(主人・客人または賓客)であり、決して彼を「長恨歌の作者」として特別に敬うものではない。白詩に「南州桃李北州梅、且喜年年作花主/南州の桃李、北州の梅、且つ喜ぶ年年花主と作れるを(南方の州では桃李を北の州では梅の花をめで、毎年毎年お花見の主人となれて私は嬉しい)」「花前歎」花二二〇九・謝一四一三」と。また弟白行簡の「李娃傳」に「娃笑而止曰、賓主之儀、且不然也/娃笑ひて止めて曰く、『賓主の儀、且つ然らざるなり』と」など。即ち宴席の主座として客をもてなしているのである。
- (11) 根據資料は白居易「與元九書」(前掲注10)および「編集拙詩成十五卷因題卷末戲贈元九李二十」詩(花一〇〇六・謝一〇〇〇)。特に後者の冒頭に「一篇の長恨に風情有、十首の秦吟は正聲に近し」とある。
- (12) 根據資料は元稹「白氏長慶集序」(『白氏文集』巻頭及び『元氏長慶集』卷五十一所收)。なおこの時の編纂者元稹の關與が如何なるものだったかについては盧旭「詩集十五卷から『白氏長慶集』の詩卷へ」白居易と元稹の編集理念の違

白居易「舊枕故衾誰與共」句の傳播と消滅(靜永)

巻をもとに明刊本（ともに中國國家圖書館蔵）を補ったもの。今回「長恨歌」を収める巻第三四六は明刊本の部分である。

j. 太平廣記―『談憶本太平廣記』（國家圖書館出版社、二〇〇九年）。同書は明嘉靖四十五年（一五六六）談憶序刊の影印。

k. 虞初志―國立公文書館内閣文庫蔵明刊本。また『續修四庫全書』第一七八三冊にも中國國家圖書館蔵（明弦歌精舍如隱草堂刻本）の影印がある。ほぼ同版か。なおこの書籍の存在を發見し、内閣文庫蔵本等の調査を行ったのは九州大學大學院生陳禪璇さんである。

l. 唐詩解―明萬曆四十三年（一六一五）序刊、九州大學附屬圖書館蔵（ホームページで全畫像を公開）。なお同書は國立公文書館内閣文庫にも蔵されるが刻版に若干の補修・追加が見られる。

(23) 清汪立名本の校注「一作舊枕故衾……」は、同書の「長恨歌」校勘記の全體から判斷すれば、汪氏が直接文苑英華本を參照して施したものとわかる。

(24) 花房英樹『白氏文集の批判的研究』（前掲注8）の「總集所收作品表」に據れば、合計七〇二首にのぼる。

(25) 元稹『白氏長慶集序』（前掲注12）參照。

(26) 原文は次の通り。（ ）内は小字雙行注。／は改行。

開府席上賦得詠美人名解愁 盧綸
不敢苦相留、明知不自由。頻眉乍欲語、斂笑又低頭。
舞態兼些醉、歌聲似帶羞。今朝忽見他、只守解人愁。

／楊郇白（總目有名無詩）／于鵠（同前）／王建（同前）／白居易（同前）

なおこの白居易唱和の痕跡は、本文及び詩題も不明であるために現在の白居易作品目録（前掲注24の花房氏著書等）には含まれていない。詳しい考證等は別稿を用意したい。

(27) 傅璇琮『唐代詩人叢考』（中華書局、一九八〇年）所收「盧綸考」に據れば盧綸の逝去は貞元十四（七九八）頃とされる。七九九年は白氏數え年二十八歳。

(28) 『文苑英華』所收の「長恨歌」が單行抄本からの轉寫である可能性は、さらに陳鴻「長恨歌傳」によっても傍證が得られる。即ち卷七九四に收録されるその本文は一般に通行するテキストに近い本文が正文として掲げられているが、同時に「麗情集」及び『京本大曲』に見える異文（英華注に頗る異同有り）と云）もその後に小字雙行注で併載されている。澤崎久和『白居易詩研究』（研文出版、二〇一三年）所收の『麗情集』所收「長恨歌傳」について、また『文苑英華』所收「麗情集」「長恨歌傳」の本文についてを參照。

(29) 澤田瑞穂「盲詩人唐汝詢生卒考」（同氏著『閑花零拾・中國詩詞隨筆』所收、研文出版、一九八六年）、陳禪璇「唐汝詢とその『唐詩解』について」（『中國文學論集』第五〇號、二〇二一年）、靜永「明末の異人唐汝詢とその唐詩注釋」（『中國文學報』第九十五冊、二〇二二年）を參照。

(30) 唐汝詢（號西陽山人）の晩年口述を記した小冊に『西陽舌瑣』一卷がある。康熙九年（一六七〇）序刊、張應時校。該本は澤田瑞穂氏の舊蔵で、現在は早稻田大學圖書館の風陵文庫所蔵である。この他にも例えば68「未成眠／未能眠」など「長恨歌」の本文異同については、實際には舊鈔本系統の文字と全集系統の文字とが各本で混じり會い、その辨別が困難なものも多い。

(34) 『四庫全書總目提要』卷一四四（小説家類存目）にある『陸氏虞初志』の提要に據れば、この書物は浙江范懋柱家天一閣藏書からの採進本である。

(35) 張國風『太平廣記會校』（北京燕山出版社、二〇一一年）所引。孫潛の該書は臺灣大學研究圖書館所蔵。富永一登『中國小説の展開』（研文出版、二〇一三年）所收の「古小説のテキスト」、及び佐野誠子「臺灣大學藏孫潛校本『太平廣記』について」（『東京大學中國語中國文學研究室紀要』第四號、二〇〇一年）參照。なお筆者は二〇二三年九月に訪臺した同僚の藤井倫明准教授を介して孫潛校本の圖版（當該部分のみ）を入手して確認。すると更に第68句「未成眠」の「成」字にも朱筆による「能」の書き入れを見つけた。

(36) 寶曆元年（八二五）白氏蘇州刺史在任中の作。

(37) 談憶本『太平廣記』では「上心」に作るが、こゝも孫潛の校記に據って「皇心」とする。

(38) 「意者不但感其事、亦欲懲尤物。窒亂階、垂於將來也。」この一文は『太平廣記』虞初志として唐汝詢『唐詩解』注ともに削除されている。

(39) 從來より參照される資料に『文德實錄』卷三藤原岳守傳の承和五年（八三八）の記事がある。即ち「太宰少貳に出だされ、由りて大唐人の貨物を檢校して、適ま『元白詩筆』を

(33) 本稿の八つの舉例のうち、19「漢宮」の異文のみは、『文苑英華本』は正文ではなく「一作漢宮」と校注に示されたも
白居易「舊枕故衾誰與共」句の傳播と消滅（靜永）

得て奏上す。帝（仁明天皇）甚だ耽悦し、從五位上を授く。」と。しかし一讀して明らかように、この記事の前提には當時既に詩人白居易の名が相當に知られていなくてはならない。且つこの記事で注目されるのは仁明天皇の「帝甚耽悦」四字である。岳守の昇進はもとより上意ではあるが、そこには父帝嵯峨上皇と母太后橘嘉智子との関係性も想定できないだろうか。上皇夫妻もきつと該書の渡來を悦ばれたに相違ない。

- (40) 「長恨歌」以外にも「秦中吟」や「新樂府」の抄本も早く傳來した可能性がある。興膳宏『古代漢詩選』（研文出版、二〇〇五年）その第三章「嵯峨天皇—平安詩壇のオルガナイザー」には、『文華秀麗集』（弘仁九年・八一八頃成立）所収の作品に「新樂府」の引用が見えることを指摘する。なお「新樂府五十首」中には「上陽白髮人」や「驪宮高」など「長恨歌」の物語と密接な関係を持つ作品が多い。

- (41) 藤原定家『奥入』（大橋家本、日本古典文學會、一九七一年）。本稿に掲げる劉詩の本文もこれに基づく。なお該書には更に劉禹錫（字夢得）について「夢得白樂天同時ノ人也。おもふ人に運れて作れる詩也。」との説明がある。

- (42) 柴格朗『劉白唱和集（全）』（勉誠出版、二〇〇四年）参照。

- (43) 『日本國見在書目錄』（室生寺本、名著刊行會、一九九六年）には、〈別集家〉の項に「白氏文集七十卷、元氏長慶集廿五卷、白氏長慶集廿九卷」とあり、また續く〈惣集家〉の項に「劉白唱和集二卷、杭越寄詩二十二卷」とある。杭越は即ち白居易と元稹の唱和を指す。

- (44) 舊鈔本系統のうち『管見抄本』（『正宗文庫本』は下三句を

「斷腸聲」に作るが平仄の點から誤倒と考える（即ち日本での誤寫）。また『龍門文庫本』は「聞鈴」に作る。

- (45) 「元和十年自朗州承召至京戲贈看花諸君子」詩、また『舊唐書』卷一六〇及び『新唐書』卷一六八の劉禹錫傳参照。

- (46) 靜永「江州左遷と諷諭詩」（『白居易「諷諭詩」の研究』所収、勉誠出版、二〇〇〇年）参照。

- (47) 「谿路千里曲、哀猿何處鳴。孤臣淚已盡、虛作斷腸聲。谿路は千里に曲がり、哀猿何れの處にか鳴く。孤臣涙已に盡き、虚しく斷腸の聲と作るのみ」と。

- (48) 一方「聞鈴」について、「長恨歌」以前の用例を検した方が、確かな用例が見つからない。白詩の用例としては「早發楚城驛」詩（花〇九七一・謝〇九六五）に「宿犬聞鈴起／宿犬鈴を聞きて起つ（早朝、役人である白居易が出かけようとすると、騎乗する馬首に着けられた鈴音に宿屋の番犬が起きてきた）」とあるのが第二の例。これは元和十二年（八一七）江州での作である。

- (49) 「東林寺白氏文集記」（前掲注14）に「且欲與二林結他生之緣／且らく二林と他生の縁を結ばんと欲す」と、「蘇州南禪院白氏文集記」（前掲注16）に「願以今生世俗文字放言綺語之因、轉爲將來世世讀佛乘轉法輪之緣也／願はくは今生世俗の文字の放言綺語の因を以て、轉じて將來世世に讀佛乘・轉法輪の緣と爲さん」と、また「長恨歌」は収めなかったと思われるが開成五年（八四〇）の「香山寺白氏洛中集記」（花三六〇八・謝三六四四）にも「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、轉爲將來世世讀佛乘之因、轉法輪之緣也／願はく

は今生世俗文字の業、狂言綺語の過を以て、轉じて將來世世讀佛乘の因、轉法輪の緣と爲さん」と。

- (50) 72「舊枕故衾／翡翠衾寒」にかなり近い関係にあると思われるのが17「承歡侍殿／侍宴」の異同である。「寝」に作るのは『金澤文庫本』『管見抄本』『正宗文庫本』『文苑英華本・正文（校注は一作宴）』『太平廣記孫潛校（談愷本作宴）』『虞初志本』『唐詩解本』である。「宴」に作るのは全集本系統の各本と『龍門文庫本』となる。

- (51) 伊藤令子「唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容——『太平廣記』の分類を手がかりに」（『中國文學報』第九十冊、二〇一八年）参照。

- (52) 例えば13「雲鬢」と95「雲鬢（一作雲髻・雲鬢）」や32「驚破霓裳羽衣曲」と98「猶似霓裳羽衣舞」のように、「長恨歌」には幾つか前後に伏線の関係を持つ表現が組み込まれている。72「舊枕」と93「推枕」もその對應関係にある一つとして讀むことができる。

- (53) 中國古典文學における專著として狩野雄『香りの詩學——中國西晉詩の芳香表現』（知泉書館、二〇二一年）参照。

- (54) 田中史生『入唐僧惠萼と東アジア、附惠萼關連史料集』（勉誠出版、二〇一四年）、また同氏「入唐僧惠萼の書寫した蘇州南禪院本『白氏文集』」（『日本歴史』第七八一號、二〇一三年）を参照。

- (55) 『金澤文庫本白氏文集（一）』（前掲注4—e）二〇五頁の圖版参照。

* 本研究はJSPS科研費「J20H01239」の助成を受けたものです。

白居易「舊枕故衾誰與共」句の傳播と消滅（靜永）

執筆者紹介Ⅱ

①専門 ②勤務先・職名 ③主要論文・著作（最近三年）

靜永 健 ①中國古典文學 ②九州大學大學院人文科學研究院教授 ③『目加田誠北平日記』（共著・主編、南京・鳳凰出版社、二〇二二） 明末の異人唐汝詢とその唐詩注釋（『中國文學報』第九五冊、二〇二二） 音讀和漢朗詠集漢詩句初稿（卷上、夏）（共著、『中國文學論集』第五二號、二〇二三）

The Circulation and Disappearance of Po Chü-i's Line
 "Who Will Now Share with Me Our Old Pillow, Our
 Old Coverlets?"

SHIZUNAGA Takeshi

The line "Who will now share with me our old pillow, our old coverlets?" (舊き枕故き衾誰とともにか), which appears in the "Aoi" 葵 chapter of the *Tale of Genji* (*Genji monogatari* 源氏物語), coincides with line 72 of "Song of Lasting Regret" ("Ch'ang-hen ko" 長恨歌) by Po Chü-i 白居易 as found in the Kanazawa Bunko 金澤文庫 manuscript of the *Po-shih wen-chi* 白氏文集 (fasc. 12), and the understanding that it represents the text of the so-called old manuscript of the *Po-shih wen-chi* would seem to be gradually taking root in academic circles. That this line belongs to Po Chü-i's original poem can be confirmed from the fact that in China, too, the text of "Song of Lasting Regret" included in the *Wen-yüan ying-hua* 文苑英華 (fasc. 346), dating from the early Sung period, also has "old pillows, old coverlets" (舊枕故衾). But once the complete *Po-shih wen-chi* (*Po-shih Ch'ang-ch'ing chi* 白氏長慶集) began to be published during the Sung period, especially from the Southern Sung onwards, this printed version came to be regarded as the definitive edition, and consequently the words "old pillows, old coverlets" were forgotten in China, and eventually the text came to read "the halcyon-plumed coverlet is cold" (翡翠衾寒).

However, quite miraculously the reading "old pillows, old coverlets" was preserved in the 50-fascicle *T'ang-shih chieh* 唐詩解 (published with a preface

dated 1615), an anthology of T'ang poems compiled by T'ang Ju-hsün 唐汝詢 (1565-1659), who spent his life as an ordinary citizen and keen reader in Shanghai in the Ming period. T'ang Ju-hsün was a quite amazing person who lost the sight of both eyes at the age of five and thereafter memorized all manner of books that he had other people read to him. All sorts of interesting investigations could be conducted regarding the question of why the text of "Song of Lasting Regret" transmitted by him preserved the original wording. But this work by T'ang Ju-hsün was subsequently superseded once again during the Ch'ing period by the *Po-shih wen-chi* (*Po-shih Ch'ang-ch'ing chi*).

This article does no more than present the results of my examination of a variant reading of a single line in a lengthy poem by Po Chü-i, but I hope that it will provide material for some lively discussion about the circulation of literary works between China and Japan.